

男女共同参画の情報をFMラジオで発信 その名は 「さっちゃんの『だ・じ・き・さ道中』」……



平河祥代さん
FMラジオパーソナリティ

Q：FMラジオのパーソナリティとはどんな仕事ですか？

ラジオ番組の司会進行をする人のことです。私は、LCVFM769で夕方5時からの生放送番組「トワイライト交差点」の木曜日を担当しています。



Q：番組で男女共同参画の情報発信をされていますが、始めたきっかけは何ですか？

私は富士見町の男女共同参画推進委員の1人ですが、ラジオからも情報を流せば皆さんに聞いていただけるかなと思って始めました。

Q：その番組は、「さっちゃんの『だ・じ・き・さ道中』」というのだそうですが、「だ・じ・き・さ道中」に込められた思いをお聞かせください。

男女共同参画推進委員をする中で、「男女共同参画」という言葉が、いかにも固い印象で、その響きだけで敬遠されているようなところがありましたので、皆さんになじんでいただけたらと思って、「男女共同参画」をぎゅっと縮めて「(男)だ・(女)じ・(共同)き・(参画)さ」としました。そうしたらその音が、東海道中膝栗毛の「やじきた道中」に似ていたことと、男女共同参画社会づくりもまだまだ道なかば、ということで、このコーナーを「さっちゃんの『だ・じ・き・さ道中』」と名付けました。「さっちゃんの」と付けたのは、私がひらかわさちよで「さっちゃん」と呼んでもらいたいことと、男女共同参画の固いイメージを少しでも柔らかくしたいと思ったからです。

Q：番組に携わってみて手ごたえはどうですか？

リスナーからの直接の反応はなかなかお聴きできなくて残念です。このコーナーで私が望んでいることは、リスナーの皆さんに男女共同参画のことや、それを一所懸

命推進している人たちがいることを知っていただきたいということです。

ですから、「関わっている方々に、スタジオにお越しただいてお話を伺う」という形をとり、ほとんど毎週ゲストをお招きしています。リスナーの皆さんの身近な方が、ゲストに来てくださるということで、草の根的にリスナーが増えていけばいいなあとも考えています。

Q：将来的に男女共同参画はどのような姿になっていくことが望ましいのでしょうか？

繰り返しお話しすることで、「ジェンダー」や「ワーク・ライフ・バランス」などの男女共同参画に関する言葉が皆さんに伝わればいいと思っています。将来、「昔、おじいちゃん・おばあちゃんの時代には、『男女共同参画』ってとりたてて言ってたんだよねえ。」って笑い話になるような、そんな世の中になればいいですね。

Q：女性に望むことを一言

職場や地域などいろいろな場面で“お役”が回ってきたら、「私にはできない！」と断らないで積極的に受けて欲しいと思います。その立場が人を育ててくれると思っていますので。



穏やかな口調のなかに、凛とした空気を漂わせたステキな人にお会いしました。

講演 「ドメスティック・バイオレンス」

去る平成21年10月31日(土)ドメスティック・バイオレンス(略してDV)防止セミナーを開催し、武蔵野大学教授小西聖子さんから御講演いただきました。



講師 小西 聖子さん

プロフィール

愛知県生まれ。東京大学・筑波大学卒。武蔵野大学人間関係学部教授、武蔵野大学大学院人間社会専攻教授、武蔵野大学心理臨床センター長、臨床心理士、精神科医、医学博士。専門は臨床心理学、トラウマ・ケア研究。主に外傷後ストレス障害(PTSD)の治療研究を行っている。「ドメスティック・バイオレンス」(白水社)など著書多数。日本犯罪学会奨励賞、第20回エイボン女性年度賞・教育賞、第8回毎日書評賞受賞。

●DVの実態(内閣府の全国調査から)

日本のDVの実態は成人女性の4分の1が一度は経験し、死ぬかもしれないと思うほど、大きな暴力を受けたことがある人が20人に1人いる。男性も8人に1人は配偶者から被害を受けているが、「何度目」被害に遭ったり「医療が必要となる」ケースは少ない。そして医療が必要で深刻な暴力を受けて介入が必要な人は、ほぼ9割以上が女性である。また、恋人や元恋人からの被害はデートDVと言われ、20代30代の若い女性にかなりあることがわかる。

DV相談の総数は伸び続けているが、その一方で、配偶者暴力相談支援センターや警察、その他専門家に相談する人は多くて数%であり、最も多いのは「誰にも言わない」人である。

東京女子医大での初診のときの調査でも、最初からDVと言う人は、ほとんどいない。

怪我、気胸、歯が折れる、など暴力の被害のような様子で来ても、「階段から落ちた」と言う人が多く、なかなか本人自らDV被害者と言う事は難しい実状を示している。

●DVはどうして起こるのか?

起こったときに止めにくいのはなぜか?

加害者は、自分が悪いとは思わず、被害者に落ち度があるから殴るのだと思っている。嘘を言っているのではなく、本気でそう思っている。さらに暴力の加害者にはいろんなタイプがあるが、権威には弱く、弱い者にはすごく無慈悲というタイプで強いものには低く出て、弱いものにはすごくいばるといのがひとつのDVの加害者の典型。こういう人は医者や家裁の調停委員とか権威のある人の前に出るとすごく礼儀正しくなって、愛想がよい。

殴る方に聞くと「殴られるようなことをするからで、殴られる人が悪い」とよく言っているが、こういう加害者の理屈に巻き込まれてはいけない。

「殴られるようなことをするからだ」と言われたとき、皆様はどういう風に考えるか。

自分が何をしたいか、他人にはわからない。しかし、加害者は、妻は自分のして欲しいこと、自分の気持ちがかかるのが当然と思っている。だから殴られるのは当然という言い方になっている。

人が思った様に行動してくれない時、人は、沢山の選択肢があり、暴力や怒鳴ることは一つの選択肢に過ぎない。暴力は振った方が100%悪いのは、そこに選択があるから。「待つ」という選択肢も当然ある。相手が殴られるようなことをするという言い方に対しては、相手が殴られるに値するのは何もない。その反応として、暴力を選ぶのは選ぶ者に責任がある。殴る理由があるならば、それはただ一つ正当防衛だけだ。

●殴られるのは私が悪い

被害者が言うのは、「殴られるのは私が悪いから」なんてこんなに自分が悪いと思うのか。恐怖の体験をするとたいがい人は自責感を感じる。そういう自責感はトラウマへの反応として生じる。繰り返し恐怖とともに「お前が悪い」「お前は馬鹿な人間だ」と言われ続け、誰かに「あなたそんなこと言われている。言っているほうがおかしいわよ」と言ってもらえる機会がないと、だんだんそれが本当であるかのように思えてくる。DVだけじゃなく虐待でも同じ状況になる。実は洗脳もこういう感じで行われる。周囲とのコミュニケーションを遮断した中で、感情を賦活させてその中で繰り返し叩き込むと人はやはり変わりやすい。

このような本来持たなくてもよい自責感を持ってしまった事例をあげると、ある女性は、夫にモップで殴られてろっ骨を骨折し、4年間ひどい暴力を受け続け、階段から突き落とされ流産した。「どうしてそうなったんだと思う」と私が尋ねると、彼女は、

「私が言われた家事と家業をちゃんとできなかったから、私が悪い」と答え、自分が悪いと思っていた。

●「愛情」と「支配」とは違う

加害者は「自分は愛情があるから、妻にさまざまな要求をするんだ」「愛情があるから、よい妻になってもらいたいから言っているだけだ」と、よく言う。

私は人を愛するというのは、人を大切にすることと離れていないと思う。人を大事にするというのが愛情であるのなら、それは支配とは違う。自分の思うとおりにならないと価値がないのなら、道具と一緒に。だから妻に様々な要求をするのは、思ったような道具になってもらいたいのだけ。大事にするなら、相手の個性を大切にしないとイケない。

自分が好きな人なら、髪が長くないといけなくて、スカートをはかなくてはならない、というなら道具と一緒に。加害者にとって妻は「気に入った物」だから大事にする。相手が生きていて相手が感情があつて相手がどういうことを思っているかには全く関心がない。こういう夫は妻の髪型、服装、態度などすべて自分の思うようにさせる。他の人との付き合いを許さない。休日も一緒にでないと外出させない。沢山の無理なルールを作り、それを破ったと言って暴力を振るう。外の男の人としゃべらないなんていうことはできない。そんな無理なルールを勝手に作ってしまう。

愛情と支配を取り違えることは、女性も、子供に対して同じような「支配」をする事がある。

私がこういう人になってもらいたいから、勉強、習い事をさせるなどを熱心にやるのが愛情だと思ひこんでしまう。自分の思うとおりにさせることと、人を大事にすることはかなり違うことなのに、それが忘れ去られてしまう。



よく聞かれる質問ベスト4

①けがや具合が悪い人なら病院に行けばいいのにどうして行かないの?

病院に来る人の中にも、被害にあっていることをなかなか言えない人が多い。

診察に来たが、夫がくっついてきて夫が見張っているケースもあり、怖いので当然言えない。もしかしたら近所のお医者さんに行つて言うと、家や婚家先にも知られてしまうんじゃないか。そういうことが恥だと思つて言えない。人に話すことは、自分の家の恥。実家や婚家先や近所に知られると恥ずかしいと思う。病院に行って治療したことがわかると、夫に伝わってしまうかもしれない。また暴力を振るわれるのではないか。それが怖い。

②どうしてそこから逃げ出せないのか。

離婚しないのか?

経済的な理由や恐怖など、もっと実際的なことが理由になっている場合が多い。例えば今の暮らしだったら、子供も大学にやれるだろうが離婚したらそれもできなく

なってしまう。母子家庭で子供を大学に進学させるのはどれだけ大変か、パートではまず、無理と思うのは誰しも思うこと。だからどうしても私は子育てが終わるまでは、殴られても我慢する。

逃げ出しても、追いかけてこられた時のことが怖い。実際に追いかけて殺されてしまったケースもある。自分も殺されるのではないか。暴力が酷いケースでは怖がつて、むしろそれなら家にいた方がいいと我慢してしまう。逃げようかと思ひあまつて、子供と一緒に来る?と尋ねると子供が転校したくないと泣いて頼んでくる。また、障害児を抱え、一人で生きていく自信が持てない、或いは親の介護などで躊躇している例もある。逃げ出した後の暮らしがあまりにも不自由だったので戻ってしまった。これもよくある。

夫にアルコール乱用など大きな問題があつた場合、私でないと治せない、という理由から離れないこともある。これがいわゆる共依存と言われる状態だが、ただし、これはほんの一例。

③やっと別れてもまた同じような人と一緒になって、またDVを受けている。どうして?

1番の理由は、そういう人達は自己評価が低いことが問題。被害を受けた人は、自分の判断力を信じられないので強引な態度に弱い。

「一緒に住もう」と言われたときに「危ないな」と思つても「ノー」と言うことができない。自分の能力を低く見積もるので、相手にリーダーシップを期待してしまう。リーダーシップは暴力と一緒にあるものではないのに、読み間違えて、支配的で強引な人をリーダーシップがあるというふうにしてしまう。

自分はダメな人間なので、ダメな人間としか一緒に暮らせないと考える人も居る。「自分は1人で生きてゆけるんだ」という感じを持ってもらうことが被害を繰り返さないために、大切なこと。

似た様な人と結婚してしまうその他の理由としては、育ってきた環境がそもそも暴力的だった場合。自分の親も暴力的DVがあり、家庭の中全体が暴力的コミュニケーションで満ちていると男性との暴力的でないコミュニケーションの想像がつかない。これは加害者側にも言える。育ってきた環境が暴力的なので女性との関係も暴力的でないコミュニケーションが想像できない。

もう一つ、過去の記憶を蘇らせて思ひおこすことがすごく怖いので、そのことを封印してしまう。前の嫌だったことは思ひ出さないようにしようとする。前に生じた被害を考えないと前の経験から学べない。人は、失敗から学ぶ。しかし過去にひどい経験をしていると普通に考えてまとめたり反省したり自由に記憶を扱うことができなくなってしまふ。トラウマ記憶とはそういうものである。そのために過去の自分の失敗の原因や、起こったことを分析できていない。その結果前の経験から学べず同じようなことをしてしまう。

④家裁の調停員からよく聞く話「夫はとてもまともそうな人だから、被害者本人の方に問題があるのではないか?」

確かに被害者本人にも問題があるケースはある。夫が暴力的で前科前歴があれば人にもわかるが、地方公務員や学校の先生で外から見たら本当に感じのいい人が家庭では暴力的である場合もよくある。妻は抑うつ状態や恐怖のため、うまく話せない場合もある。あまりに怖いことは考えがまとまらない、記憶もまとまらない、するとうまく話せない。言葉にならない。感情だけが出てきてわあ〜と泣くだけで全然話しができない。「あんな人殺してください」くらいしか言えずどんな暴力を受けたかを具体的に話せない。具体的に話さないと意味がない。一方、夫は感じがよく、理路整然と話すこともある。

うまく聞ければそうじゃないのにという状況で、妻の言っていることがほとんど調停で通らないこともある。普通に見える人の中にも、暴力を振るう人が存在していることを知って頂きたい。

●加害者に障害や病気が疑われる場合

夫にパーソナリティ障害や発達障害が疑われる例もあり、これは結構多い。パーソナリティ障害の中にも、自己愛的な反社会性のパーソナリティ障害を持つ方。たとえば、社会に対してもルールを平気で破ったり、人が苦しむところを見るのが好きな人が少数ながら世の中にはいる。自己愛的な人は、自分がどのくらいすばらしいか、示すのに夢中になってしまい、回りにいる人間を物みたいに使う。そういうパーソナリティ障害の人もある。反社会性パーソナリティ障害の人はほとんど男性だが、自己愛性のパーソナリティ障害の方は女性にもいる。

特に最近多いのが、発達障害、アスペルガー障害。今の大人の中には、まだわからない人が多く適応が良ければ未治療のまま結婚している人も多い。発達障害があると対人関係がうまくいかない。自分の感情をうまく伝えることも、他人の感情をうまく受け取ること難しいので、被害にも加害にもなりやすい。

高齢のケースでは、夫がうつ病や認知症などになり、最初の段階で急に暴力が初発する例もある。

妻にうつ病や統合失調症がおこつてきて、それを夫がどう扱つていいのかわからなくて暴力のきっかけとなつている例もある。

女性が暴力を振るわないわけではない。お互いに行き違った時に、妻が包丁を持って、「私これから死んでやる」と言つて自殺未遂などで脅し、夫が妻の言うことを聞いている例もある。

これを繰り返すうちに夫がどうしたらいいかわからなくなって、相談にくるケースも少ないがある。

●DV被害者の解離性障害について

DVの被害者の症状としておこる解離性障害はど

んな風になるか。“心の中の何かが実際に切り離される”と思つて欲しい。

何かのきっかけがあつたとき、過去の記憶、ひとつつながりて、思ひ出せる物と思ひ出せない物があるが、何かがはっきり抜けている感じはないですよね。DVであれば、暴力を受けている間の記憶が全くない。人は精神的な恐怖だけでもこういうことは起こる。

DVの症状として解離症状はよくあるが、外からは見えないし知的能力は全く落ちない。外からみるとすごく冷静な人に見えるので、他人事のように、真剣味が感じられない。実際にあつたケースでは「お前は非常にダメな人間だから自殺しろ」と夫に言われ、包丁を持って自分を切るが、その時の恐怖はあまりにも大きく、感情が付いてこない。その話を聞いているときも「切りました。」と淡々と話し全然怖さが伝わつてこない。あまりにも恐怖が強いとそうなるってしまう。

また、具合が悪い時ほど、へらへらしていても真剣味が無い。危ない感じが伝わって来ない。診るのがとても大変。真剣味がなくなったときがこの人の一番悪いときなんだろうと思わないと介入のタイミングを間違えてしまう。「解離症状は治ります。」そう言つてあげるとそれだけですごく良くなる。治療できなくていいから、少なくとも、そういう症状でこの人はこんなわけのわからない形になっているんだということを知って頂きたい。

虐待の被害者にも同様に症状が出る。ずっとお腹をなぐられていた虐待の被害者も、夢にこの様子を見ると、お腹が痛くなつたり、お腹が赤くなつたりする。奇跡でおこるのではなく、症状でおこる。

実際に被害者に遭つたことのある人は、今お話しした症状のいくつかは、きっと思ひ当たると思う。

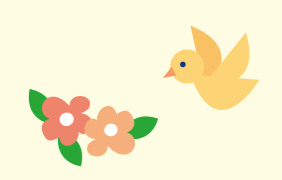
今はみんなDVについて知識を持っている。

しかしDVの詳しい内容について、本当に納得してわかっているのか、というところと実際に仕事として関わっている人でも何となく腑に落ちない方が多い。頭だけで理解していると、DVの被害者が加害者の元に戻つてしまうと「私だったら戻つたりしないのに」というレベルから一歩も進まない。

個人個人の細かい背景をよく聴いて理解しないと、納得して共感することができない。

全部わかつてこそ、この人の立場だと仕方ない、と共感的に聴くことができる。

「こういう立場に立てば私でも同じことをしてしまうかも知れない」ことを理解して欲しい。



男女共同参画に関する 県民意識調査の主な結果

長野県では、男女共同参画社会づくりの推進を図る基礎資料とするため、男女共同参画に関する県民の意識調査を実施しましたので、主な結果についてご紹介します。

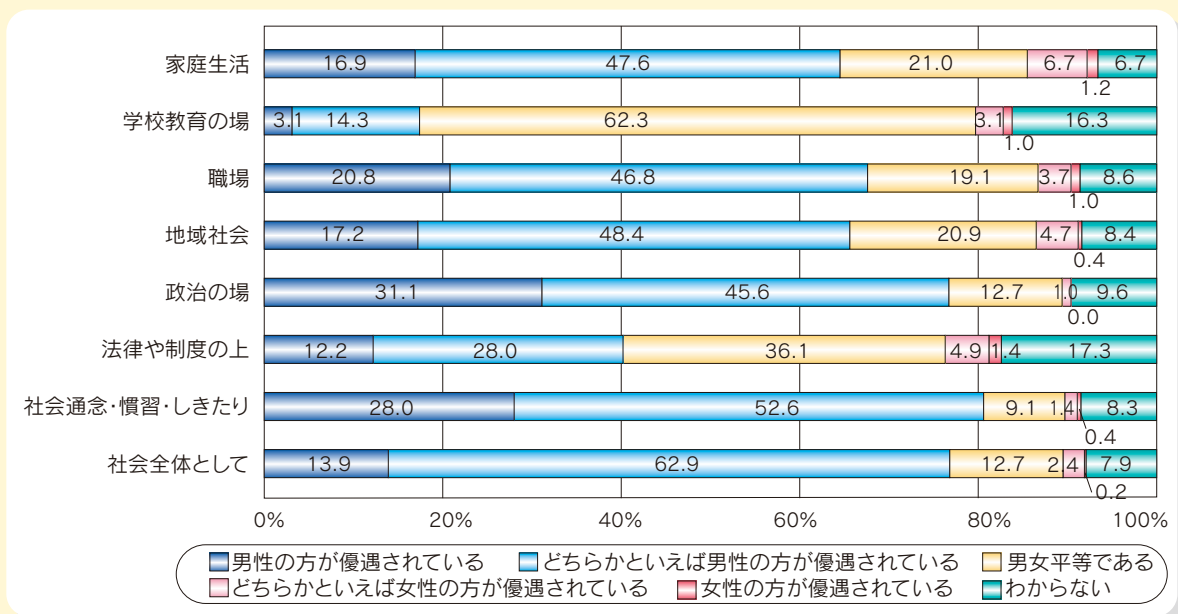
この調査は平成21年10月14日～11月16日まで、長野県内在住の満20歳以上の男女1,000人に調査票を送付して実施しました。512人の方に回答していただき、回答率は51.2%でした。

調査結果の詳細は、県のホームページ
(<http://www.pref.nagano.jp/kikaku/danjo/danjo/shiryoy4-2%201001.pdf>)をご覧ください。

① 各分野の男女平等感について

社会全体として、男性が優遇されていると答えた人が76.8%（「男性の方が優遇されている」13.9%+「どちらかといえば男性の方が優遇されている」62.9%）となっています。

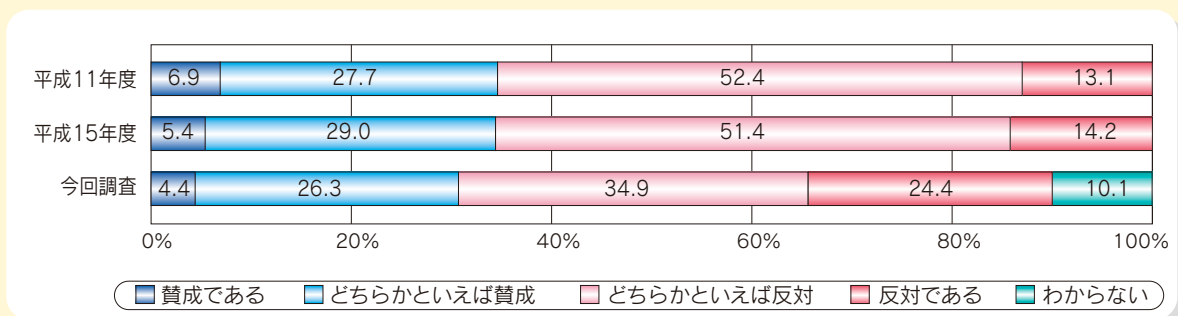
特に、「社会通念・慣習・しきたり」や「政治の場」などの分野で男性の方が優遇されていると考える人が多くなっています。



② 「男は仕事、女は家庭」という性別役割分担意識について

「反対」とする割合が59.2%（「反対である」24.4%+「どちらかといえば反対」34.9%）、「賛成」とする割合が30.7%（「賛成である」4.4%+「どちらかといえば賛成」26.3%）で、性別によって役割を固定する考え方に反対の回答が賛成を28.5ポイント上回っています。

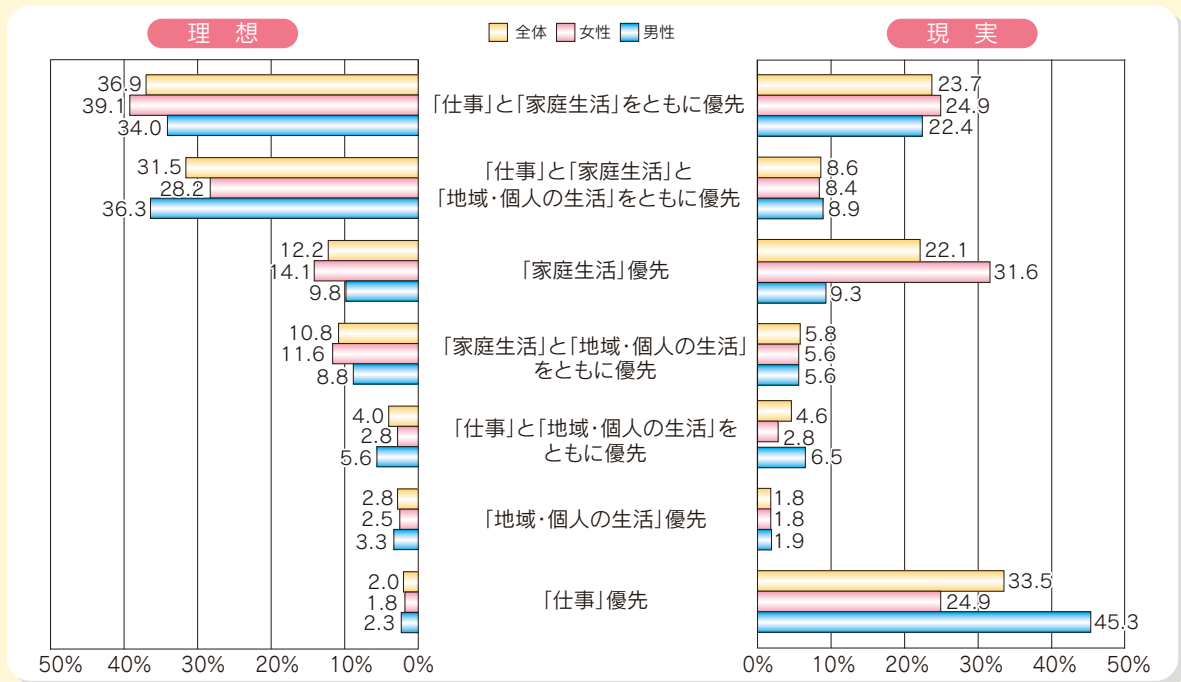
11年度調査と比較すると、「反対である」が増加（13.1%→24.4%）し、「賛成である」が減少（6.9%→4.4%）しました。



※少数点以下第2位を四捨五入しているため、内訳の合計が計に一致しないことがあります。

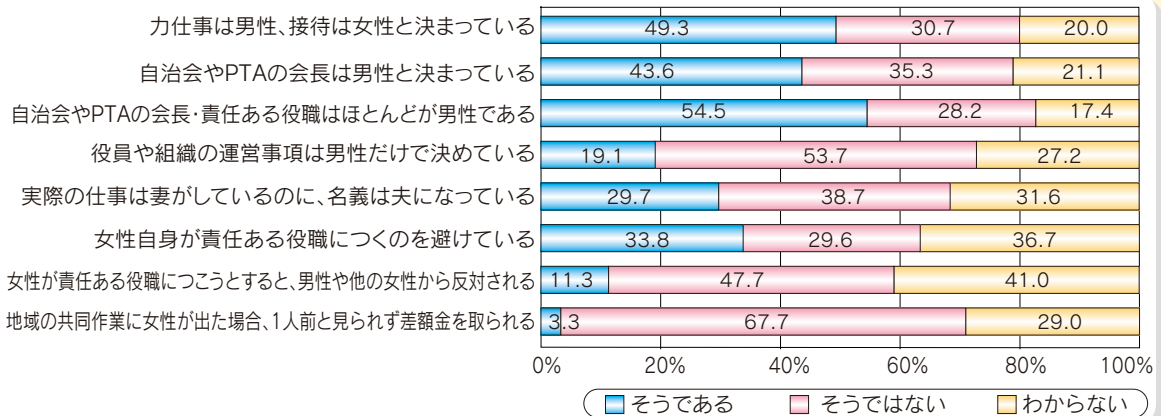
③ ライフスタイルの理想と現実について

「仕事優先」を希望する割合は2.0%にすぎませんが、現実には33.5%が「仕事優先」と回答しています。また、「仕事と家庭生活と地域・個人の生活をともに優先」を希望する割合は31.5%ですが、現実には8.6%、「仕事と家庭生活をともに優先」を希望する割合は36.9%ですが、現実には23.7%と回答しています。希望と現実には差がみられます。



④ 地域活動における男女共同参画について

地域活動においては、「自治会やPTAの会長・責任ある役職はほとんどが男性である」(54.5%)や「力仕事は男性、接待は女性と決まっている」(49.3%)、「自治会やPTAの会長は男性と決まっている」(43.6%)という回答が多くなっていますが、10年度に実施した調査と比較するとその割合が減少しています(10年度はそれぞれ74.9%、57.6%、50.3%)。一方で、「女性自身が責任ある役職につくのを避けている」との回答もありました。



今回の調査結果によると、性別による固定的な役割分担意識が減少し、地域活動において少しずつ女性の参画が進んでいる状況がみられる一方で、社会通念・慣習・しきたりなどの分野で男女の不平等感が強くみられます。誰もが暮らしやすい社会とはどのようなものでしょうか。一人ひとりの個性を大切にしたいやりのある社会になるように、もう一度考えてみませんか。

発行日 平成22年2月20日

発行 長野県男女共同参画センター“あいとびあ”
〒394-0081 長野県岡谷市長地権現町4丁目11番51号
TEL 0266-22-5781 FAX 0266-22-5783

相談専用電話 0266-22-8822
E-Mail aitopia@pref.nagano.jp
URL <http://www.pref.nagano.danjo-aitopia.jp/>